

火星年代記

レイ・ブラッドベリ

小笠原豊樹訳



訳者略歴 昭和7年生，東京外国語大学卒，詩人・ロシア文学研究家・英米文学翻訳家 主訳書「グループ」マッカーシイ「太陽の黄金の林檎」ブラッドベリ「縞模様の霊柩車」マクドナルド（以上早川書房刊）他多数

HM=Hayakawa Mystery
SF=Science Fiction
JA=Japanese Author
NV=Novel
NF=Nonfiction
Jr=Junior
FT=Fantasy

火星年代記

〈NV114〉

昭和五十一年三月十五日 発行
昭和五十六年九月三十日 十二刷

（定価はカバーに表
示してあります）

著 者

レイ・ブラッドベリ

訳 者

小笠原豊樹

発行者

早川清

発行所

株式会社 早川書房

郵便番号 一〇一

東京都千代田区神田多町二丁目二
電話東京（二五四）一五五一（代）
振替番号 東京・六一四七七九

乱丁本・落丁本は本社またはお買求めの書店にてお取替えいたします。

ハヤカワ文庫NV

〈NV114〉

火星年代記

レイ・ブラッドベリ

小笠原豊樹訳



日本語版翻訳権独占
早川書房

© 1976 Hayakawa Publishing, Inc.

THE MARTIAN CHRONICLES

by

Ray Bradbury

Copyright © 1946 by

Ray Bradbury

Translated by

Toyoki Ogasawara

Published 1976 in Japan by

HAYAKAWA PUBLISHING, INC.

This book is published in Japan by arrangement
with HAROLD MATSON COMPANY, INC., through
CHARLES E. TUTTLE CO., INC., TOKYO.

わが妻マーガリートに愛をこめて

まえがき・ノート

本書はおそらく、ブラッドベリの作品中、もっともポピュラーなものである。八年前（一九五〇年）出版されて以来、本書は、その後ぞくぞくと出版された多数のSF作品に伍して、徐々に、動かしがたい評価を勝ち得てきた。本書はもちろん、かならずしもクラシックとはいえない。しかし、その内容は、自ら他のSF作品群にぬきんでている。真の意味での個性的な響きを、この作品は伝えている——事実、だれも、レイ・ブラッドベリのように書かないのだ。

『火星年代記』は、パルプ・マガジン式のSFに伝統的なアイデアを、数多く用いている。テレパシー、空想の具象化、ロボット、集団催眠、異次元時間の交錯、青い燐光から生まれたスーパースーパー生物、地上最後の男、また女、人類の自滅等々……。そこで、これらのすべてが、ブラッドベリの手になる、この世のものならぬ神話に対して、恰も、壮大な寺院に対してその石材の一つ一つが果すとおなじ役割を果しているのだ。彼は、こうした月並みな素材を用いてSFを書く——しかし、それら作品に籠められた彼の意図は、月並みなSF作家のそれとは、自ら類を異にしているのだ。

この、すぐれた天賦に恵まれた若い作家は、じつは一人のモラリストなのだ。彼は、ファンタジイとして知られる文学形式の中で、もっとも自由に書くことができる——これは、たとえば、もしより大きな例証をもとめるなら、バンヤンやショウが、アレゴリーや演劇を媒体として、彼らの真意を、もっとも自由に発表したモラリストであつたのに似ている。

そしてブラッドベリは、一つの単純明瞭な、しかも圧倒的なモラルの問題を捕え、いうまでもないことながら、それを飽くまで追求しようとしているのだ。彼は、われわれの時代を——毎日毎日が、新らしい、恐るべき狂人の空想を産みだしている時代——スプートニクや、スーパー・スプートニクや、月への探査隊や人間宇宙船に象徴される時代——を、こんなふうに捕えている。つまり、われわれは、科学技術万能主義という精神病の手に、にぎられていると彼はいうのだ。そしてこの精神病の影響は、やがて地球人類を絶滅させ、われわれの愛するこの美しい惑星を破壊してしまふ、と考える。

火星植民というテーマをめぐる回転するブラッドベリのみごとな空想の数々は、詩的空想も気まぐれなそれも、諷刺もその一つ一つすべてが、この深刻なモラルの問題を反映しているのだ。

彼の火星植民者たちは、全部とはいわないがその大多数が火星の壮麗な大文明を、最後には破壊せずにはいられないのだ。それは彼らが、かつて地球の文明を、破壊せずにはいられないのと同じことなのだ。彼らは、本書の中のスペンダーたちを、殺す以外のことを何ひとつ思いつけない——もっとも、時折り彼らも、スペンダーたちを殺してしまつてから、殉教者として祭りあげることにはするのだけれど。

こうしたブラッドベリの祖先は、そのイマジネーションが、本質的に現実の科学的考察に

限定されているジュール・ヴェルヌやウエルズではない。彼の場合はむしろ、詩人とモラリストのイマジネーションを混ぜ合わせた、ステイプルドンやエジスンやロード・ダンサニーなのだ。彼は彼の作品の目的を、ごく何気なくこういつている『SFはすばらしい威力をもったハンマーだ。ぼくは、もし必要がある場合には、人を一人にしておけないお節介な連中の頭をコッソリとやり、向う脛を叩けばらうためにつかおうと思っている』これに彼は、『ものをものとしておけない』人々とつけ加えてもいいだろう。なぜなら、彼は、もし私が大変な読みちがいをしていないかぎり、その微光をはなつおどろおどろしい空想の霧を通して、一つの教訓をわれわれに与えようとしているのだ。その教訓とはつまり、宇宙飛行はいままだ机上のものであり、人類もまだ、精神的には玩世不恭な子供であるということ——悲劇的な偶然によって発明された、恐るべき玩具を持たされてしまった子供だということを教えているのだ。

『火星年代記』はある意味で、〈宇宙版千夜一夜物語〉である。と同時に、より深い意味では、ホーソーンの、空想にみちた寓話とおなじ、深刻な意味と苦悩とをもった物語でもあるのだ。

クリフトン・ファディマン

(福島正実訳)

年表

まえがき・ノート	四
一九九九年一月 ロケットの夏	二
一九九九年二月 イラ	三
一九九九年八月 夏の夜	三
一九九九年八月 地球の人々	三七
二〇〇〇年三月 納税者	六〇
二〇〇〇年四月 第三探検隊	六二
二〇〇一年六月 月は今でも明かるいが	六七
二〇〇一年八月 移住者たち	二四
二〇〇一年十二月 緑の朝	二六
二〇〇二年二月 いなご	二三
二〇〇二年八月 夜の邂逅	二四
二〇〇二年十月 岸	二七
二〇〇三年二月 とかくするうちに	二九
二〇〇三年四月 音楽家たち	五〇

二〇〇三年六月	空のあなたの道へ……………	一五三
二〇〇四―〇五年	名前をつける……………	一七三
二〇〇五年四月	第二のアッシャー邸……………	一七五
二〇〇五年八月	年老いた人たち……………	二〇二
二〇〇五年九月	火星の人……………	二〇三
二〇〇五年十一月	鞆店……………	二三六
二〇〇五年十一月	オフ・シーズン……………	二三九
二〇〇五年十一月	地球を見守る人たち……………	二四六
二〇〇五年十二月	沈黙の町……………	二五二
二〇二六年四月	長の年月……………	二七〇
二〇二六年八月	優しく雨ぞ降りしきる……………	二八七
二〇二六年十月	百万年ピクニック……………	二九八

火星年代記

哲学者はいった――

「驚きを若がえらせるのは
良いことだ。宇宙旅行はわ
たしたちみんなをもう一度
子供に還らせてくれた」

一九九九年一月　ロケットの夏

ひとときはオハイオ州の冬だった。ドアはとざされ、窓には錠がおり、窓ガラスは霜に曇り、どの屋根もつららに縁どられ、斜面でスキーをする子供たちや、毛皮にくるまって大きな黒い熊のように凍った街を行き来する主婦たち。

それから、暖かさの大波が田舎町を横切った。熱い空気の大津波。まるで誰かがパン焼き窯の戸をあけっぱなしにしたようだった。別荘と灌木の茂みと子供たちのあいだで、熱気が脈を打った。つらは落ち、こなごなに砕け、溶け始めた。ドアが勢いよくひらいた。窓が勢いよく押しあげられた。子供たちは毛織ウールの服をぬいだ。主婦たちは熊の仮装をぬぎすてた。雪がとけ、去年の夏の古い緑の芝生があらわになった。

ロケットの夏。そのことばが、風通しのよくなった家に住む人々の口から口へ伝わった。ロケットの夏。あたたかい砂漠の空気が、窓ガラスの霜の模様を変化させ、芸術作品を消した。スキーや橇が俄かに無用のものとなった。冷たい空から町に降りつづいた雪は、地面に触れる前に、熱い雨に変質した。

ロケットの夏。人々は、しずくの落ちるポーチから身を乗り出して、赤らんでゆく空を見守っ

た。

ロケットは、ピンク色の炎の雲と釜の熱気を噴出しながら、発進基地に横たわっていた。寒い冬の朝、その力強い排気で夏をつくりだしながら、ロケットは立っていた。ロケットが気候を決定し、ほんの一瞬、夏がこの地上を覆った……

一九九九年二月 イラ

その水晶の柱の家は、火星の空虚な海のほとりにあり、毎朝、K夫人は、水晶の壁に実る果物をたべ、磁力砂で家の掃除をする。その様がよく見えた。磁力砂は埃をすっかり吸い取り、熱風に乗って吹き散ってしまうのである。午後になると、化石の海はあたたまり、ひっそり静止し、庭の葡萄酒の木はかたくなに突っ立ち、遠くの小さな火星人の骨の町はとざされ、だれ一人戸外に出ようとする者はない。そんなときK氏は自分の部屋にとじこもり、金属製の本をひらいて、まるでハーブでも弾くように、浮き出た象形文字を片手で撫でるのだった。指に撫でられると、本のなかから声が、やさしい古代の声が語り始めた。まだ海が赤い流れとなって岸をめぐり、古代の人々が無数の金属製の昆虫や電気蜘蛛をたずさえて戦いに出掛けた頃の物語を。

K夫妻が死んだ海のほとりに住み始めてから、もう二十年になる。およそ十世紀も昔から、ひまわりのように廻転して太陽を追うこの家に、祖先たちも住みついていたのだった。

K夫妻は老人ではない。二人とも、真正の火星人らしい茶色がかった美しい肌と、黄色い貨幣のような目と、やわらかい音楽的な声のもちぬしである。かつて二人は、化学薬品の炎で絵を描いたり、葡萄酒の木が緑色の液体で運河を満たす季節には水泳をしたり、談話室の青い燐光を放

つ肖像画のそばで語り明かしたりすることが好きだった。

現在の二人は幸福ではない。

今朝、K夫人は立ち並ぶ柱のあいだに立ち、砂漠の砂が熱せられて黄色い蠟に溶け、地平線を走る音に耳傾けていた。

何かが起る。

夫人は待った。

夫人は、火星の青空を見守った。いまにも空がひきつり、縮み、光り輝く奇蹟を砂の上に吐き出すかもしれない。

だが何事も起こらなかった。

待ちくたびれて、夫人は、霧に覆われ始めた柱のあいだを歩いた。縦溝の彫られた柱の頂から、おだやかな雨が湧き出て、焼けただれた大気を冷やし、やさしく夫人に降りそそいだ。暑い日も、入江のなかを歩むようなものである。家の床は、冷たい流れにきらめいた。遠くから、絶え間なく夫が書物を奏でる音がきこえた。夫の指は、古代の唄に飽きることを知らぬらしい。あの不思議な本に費やすのとおなじ時間だけ、わたしを抱いて、撫でまわしてくれないものか。いかそんな日がふたたびやって来ることを、夫人は心ひそかに祈った。

しかし、そんなことは考えられない。夫人は頭を横に振り、あきらめの身ぶりで、かすかに肩をすくめた。まぶたがそっと金色の目を覆った。結婚というものは、人を若いうちから老いさせ、平凡にしてしまう。

夫人は椅子に腰掛けた。椅子は、夫人の動きにつれて、夫人の体にびったりと形をあわせた。神経質そうに、夫人はかたくまぶたをとじた。

夢が始まった。

夫人の茶色の指がふるえ、もちあがり、空気を握んだ。一瞬後、夫人ははっとして身を起こし、息を弾ませた。

だれかの姿が見える筈だというように、すばやくあたりを見まわした。それから、がっかりした表情になった。柱と柱のあいだの空間には、だれもいない。

夫が、三角形の戸口に現われた。「呼んだかい？」と、いらいらした声で訊ねた。

「いいえ！」と、夫人は大声で言った。

「何かどなっているのが、きこえたよ」

「そう？ うとうとして、夢を見たの！」

「まっぴるまに夢か？ 珍しいね」

夢に頬を打たれでもしたように、夫人は茫然と呟いた。「変だわ、変だわ。今の夢」

「どんな夢？」夫は書物に帰りたい様子である。

「男のひとの夢なの」

「男？」

「背が高くて、六フィート一インチもあるの」

「馬鹿々々しい。巨人じゃないか。奇形の巨人だ」

「でも」——夫人は言い淀んだ——「普通に見えるの。そんなに背が高いのに。しかも——馬鹿みたいだって言われるかもしれないけど——そのひと、青い目なのよ！」

「青い目！ あきれたね！」と、K氏は叫んだ。「夢のつづきはどうなるんだい。ひょっとすると、そいつの髪は黒かったんじゃないのか」